「ヒロシマからのエコー愛と平和と軍縮への呼びかけ"

*「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい。高慢にならず、卑しい者と交わり、自分より賢いと主張してはならない。悪には悪をもって報いず、すべての人の目に尊いことを思いなさい。できることなら、あなたがたにかかわる限り、すべての人と平和に暮らしなさい。"*ローマ12:14-18

この手紙の起源は、2018年3月15日に広島で開かれた宣教師たちの集まりにさかのぼるが、核兵器が敵対的に配備される脅威が迫り、私たちの世界が世界的な紛争の瀬戸際にますます近づいていることは明らかである。以下は、原爆被爆者である山崎敦子のプレゼンテーションから派生したインタビューである。私の知る限り、日本基督教団広島教会での彼女の講演は、このテーマに関する彼女の最後の講演のひとつである。

山崎敦子、被爆者、広島教会員。

トーマス：広島にずっと住んでいて、広島教会の信徒でもある山崎敦子さんと一緒です。敦子さん、自己紹介をお願いします。

敦子：ありがとう、トーマス。私の名前は山崎敦子、被爆者でありクリスチャンです。今日は、1945年8月6日という運命の日について、私の体験とその後の出来事についてお話しします。

トーマスその日のことから始めましょう。その日の朝と、その時あなたがいた場所を教えてください。

敦子：朝は暑かった。私は11歳2カ月、小学5年生だった。私の家は爆心地から南東に2.5キロのところにあった。夏休みとはいえ、その日は月曜日、つまり登校日だった。私たちが朝食のテーブルについていると、突然西からまばゆい閃光が走った。

トーマスみんなの注目を集めたに違いない。フラッシュの直後はどうでしたか？

敦子しばらくして、耳をつんざくような轟音の中、家が激しく揺れた。昼が一瞬にして夜に変わった。母は台所から叫んだ。私と妹は "大丈夫 "と答えました。家具は散乱し、ガラスの破片があちこちに埋め込まれ、テーブルはひっくり返っていた。一番気になったのは、私のそばにいた愛犬の姿が消えていたことだ。

トーマスそれは悲惨ですね。犬は見つかりましたか？

敦子：ええ、2階から犬の鳴き声が聞こえたんです。でも、上がろうとしたら階段がダメになってた。屋根にぽっかり穴が開いて、空が見えていたんです。

トーマス何が起こったのかを理解しようとしたとき、外には何が見えたのですか？

敦子大通りに向かうと、街の中心部から無数の被災者がやってくるのが見えた。彼らの顔は腫れ上がり、埃にまみれ、髪はもつれ、服はボロボロだった。ほとんどが、性別もわからないほど醜くなっていた。傷口からは血が流れ、彼らの顔に不気味な黒い光沢を与えていた。腕はボロボロの服のようなものを着て前に伸びていたが、皮膚は焼けてはがれていた。

広島市郊外に向かって無言で移動する、皮膚をはぎ取った被爆者たち。被爆者の作品：広島平和記念資料館

トーマス恐ろしい光景ですね。あの日の映像で特に印象に残っているものはありますか？

敦子母親が子供を抱きしめている。顔は黒こげで、子どもの体はゆがんでいた。翌日、センター公園で再会しましたが、もう亡くなっていました。

トーマス：心が痛みます。生存者に救いの手を差し伸べましたか？

敦子：私たちはそうしたかった。でも、火傷した人に水を飲ませると命にかかわるから、やめたほうがいいと言われたんです。一口でも飲ませなかったという罪悪感が私を苦しめました。

トーマス関連して、平和記念公園と平和記念資料館についてどう思いますか？

敦子：ええ、今は慰霊碑になっているあの辺りは、昔は活気のある商店街でした。夫の実家がありました。1945年の春、彼らは広島から疎開しましたが、その後戻ってきました。月6日、大惨事が起こった。当時、臨時教師だった夫は学校へ向かった。瓦礫に埋もれ、片目を失明し、その後、有毒な黒い雨にさらされた。夫は家に戻りましたが、家族はいませんでした。

トーマスご主人は大変だったでしょうね。彼はどう対処しましたか？

敦子：喉の渇きから死体だらけの川で酒を飲んだ。その後、同級生のケンちゃんに出会う。束の間の再会は、ケンチャンが10日後に放射線病で亡くなるという悲劇的な結末を迎えた。夫の叔父は、彼らが広島に戻ったことを深く後悔していました。特に、彼らが疎開していた名古屋は手つかずのままでしたから。

トーマス：話は変わりますが、数年後、広島教会はどのような記念行事を行ったのでしょうか？

敦子 1982年、広島教会は8月6日前後に追悼礼拝を始めました。当初は30人の原爆犠牲者を追悼していました。ある牧師が、原爆投下は「神の恵み」だと言ったことに、私は長年戸惑いを感じてきました。原爆の後遺症で娘さんを亡くしたにもかかわらず、彼の信仰は驚くべきものである。

広島教会、UCCJ、広島、日本

トーマス：確かに畏敬の念を抱かせます。広島と長崎の出来事から、世界は何を学ぶべきだと思いますか？

敦子：核兵器は忌まわしいものです。その根絶は、私のような被爆者の心からの願いです。宗藤正三牧師は、この恐ろしさを証しすることに生涯を捧げました。2017年、核兵器廃絶国際キ

ャンペーン（ICAN）は、国連核兵器禁止条約の順守と実施を推進する100カ国の非政府組織の連合体であり、ノーベル平和賞を受賞した。私たちは、若い世代が世界平和と軍縮のための私たちの訴えに耳を傾けてくれることを願っている。

パウロはローマの信徒への手紙12章14節から18節で、祝福し、喜び、泣き、平和に生きなさいと教えている。私たちの愛は本物の愛でなければならない。他者に仕え、苦しみに直面しても忍耐強く、平和を求め、善をもって悪に対応することが重要なのだ。これらの価値観は、戦争の恐ろしさ、人間の精神の強さ、平和な世界への希望を示す、敦子のインタビューからの包括的なメッセージと一致している。

では、何が収穫なのか？

私たちの体は、この世に合わせるのではなく、心の一新によって変えられた、生けるいけにえでなければならない。真の愛、悪を憎む心、善への献身、信者同士の相互愛、調和、苦難の中での忍耐、もてなし、迫害する者への祝福、そして平和と報復しないという最優先の価値観の重要性を把握しなければならない。

すべての原爆犠牲者を追悼するための永遠の炎。
広島平和記念公園。

敦子から、彼女の人生とUCCJ広島教会の人生における神の変容的な恵みについての深く、共同的で、個人的な説明は、私たち自身が受け入れることのできる視点を提供してくれることを理解した。生涯を通して神の恵みに触れた信者の模範である彼女の物語が、愛と平和と無私の心に深く根ざした倫理に向かって私たちをチャレンジしてくれることを願っている。